

群 教 七	101-01
	平25.249集
	特・特別支援

自分で決めて自分で食べる力を 高める食事指導

—気持ちの表現と摂食機能の発達に視点を当てた
「食事指導支援シート」の活用を通して—

長期研修員 福田 さとみ

キーワード 【特別支援教育 食事指導 気持ちの表現 摂食機能 支援シート】

I 主題設定の理由

特別支援学校に在籍する多くの児童が食べることの困難を抱える。障害の重度・重複化に伴い、肢体不自由特別支援学校において、食事の全部または半分を教師の介助により食べる児童は8割を超える。介助により食べる場合、介助者との意思疎通の困難を抱えることが多い。「これを食べたい、食べたくない」といった気持ちが介助者に十分に伝わらず、受け身の食事になりやすいことが課題となる。また、多くの児童が、食べ物を取り込むことや、かんだり飲み込んだりすること、つまり、摂食機能上の困難を抱える。さらに、口を開け過ぎる、丸飲み込みをするといった食べ方は、自食をしている児童にも見られ、摂食機能上の困難は肢体不自由のある児童だけの問題ではない。摂食機能上の困難はむせやせき込みなどの苦痛を伴い、窒息といった命の危険につながることもある。

食べることは、単に栄養を確保するための行為ではない。五感を働かせて味わうことであり、おいしい物を食べて幸せを感じられることでもある。また、人と食事を共にすることにより、かかわりや情動交流も生まれる。つまり、食べることは、健康面をはじめ、情緒や社会性、コミュニケーションといった、人間発達の多くの側面にかかわる重要な行為であると言える。

このことから、特別支援学校の教師は食べる行為の重要性を認識し、表情や口の動きなどに現れる児童の気持ちに共感し、気持ちに添って食事指導を進めていくことが求められる。さらに、摂食機能とその発達に関する理解に基づき、適切な食事指導を行うことで、児童の取り込む力やかむ力を高めることが求められる。介助で食べる行為であっても、食べるかどうか、何を食べるかを自分で決めて、口唇や舌を動かして自分で食べることは、生涯にわたって、主体的に生きる力につながると考える。

群馬県特別支援教育推進計画では、障害のある子どもなどの教育的ニーズにこたえ、その可能性を最大限に伸ばすために、「教職員や学校の専門性向上の実現」を基本目標の一つに挙げている。児童の命や発達にかかわる食事指導における専門性向上は、特別支援学校が果たすべき重要な課題と言える。

一方、研究協力校での食事指導に関する意識調査によると、9割を超える教師が食事指導を重要な領域ととらえると同時に、難しい領域と感じている実態がある。特に難しいと感じる項目として、摂食機能の向上、適切な実態把握、安全な介助に続き、コミュニケーションが挙げられた。理由として、経験の不足、研修を受ける機会の不足などが挙げられる。さらに、先行研究や書籍から得られる摂食機能に関する知識を具体的な児童の姿に結び付けて、食事指導に生かすことの難しさが理由として考えられる。

このような課題を受けて、気持ちの表現と摂食機能の発達に視点を当てた「食事指導支援シート」（以下支援シートと記す）を作成し、教師の食事指導を支援することを考えた。教師が支援シートを活用し、単に摂食機能の向上を目指すのではなく、児童の気持ちに添いながら食事指導を行うことで、児童の自分で決めて気持ちを表現する力や自分で食べる力を高めることにつながると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

特別支援学校に在籍する児童の食事指導において、教師が支援シートを活用し、気持ちの表現や摂食機能の発達を把握し、児童の気持ちや摂食機能の実態に添って指導を行うことが、自分で決めて自分で食べる力を高めるために有効であることを明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

1 支援シートを活用した指導計画の作成

指導計画の作成過程では、支援シートを活用することにより、児童の気持ちの表現や摂食機能の発達をとらえる視点が分かり、適切な実態把握に基づいて目標と手だてを導くことができるであろう。

2 支援シートを活用した食事指導の実践

児童の気持ちの表現や食べ方を的確にとらえながら指導の修正を重ねることで、児童の自分で決めて気持ちを表現する力や自分で食べる力を高めることができるであろう。

3 支援シートを活用した実践の検証

検証の過程では、支援シートにより作成した指導計画の修正過程やビデオ映像を分析し、教師の指導の変化と児童の変化をとらえることで、支援シートの有効性を検証することができるであろう。

Ⅳ 研究内容の概要

本研究における食べることの困難とは、介助によって食べることにより生じる、介助者との意思疎通の困難のことである。さらに、多くの児童が抱える、食べ物を取り込むことやかんだり飲み込んだりするものの困難、つまり、摂食機能上の困難も含む。

自分で決めて自分で食べる力とは、食べるかどうか、何を食べたいのかを決めて表情や口の動きで表現したり、自分の力で口唇を閉じて食べ物を取り込んだりする力のことである。介助を受けて食べる行為であっても、気持ちを表現して、口唇や舌を動かして自分で食べることにより、主体的に食べることにつながる。

支援シートは、食事指導支援Aシートと食事指導支援Bシートから構成されている。食事指導支援Aシートは、気持ちの表現と摂食機能の発達過程表から発達の全体像を確認することができる。食事指導支援Bシートは、気持ちの表現と摂食機能の各機能について、発達段階表と発達段階ごとに必要な手だてが示されており、実態に応じた目標と手だてを導くことができる。

本研究においては、初期食、中期食、後期食を食べている3名の児童を抽出し、食事指導を担当する担任の教師や同じ学級の教師、自立活動部の教師の協力を得て実践する。実践は9月から2か月間で行う。10月初旬に1回目評価と指導計画の修正を行い、指導を見直して実践する。ビデオ映像を使った観察法により児童の気持ちの表現と摂食機能の変化をとらえていく。

Ⅴ 研究のまとめ

1 成果

- 支援シートの活用により、教師が気持ちの表現や摂食機能の発達をとらえる視点を得ることができた。児童の表情の変化や口唇の動きを的確にとらえながら指導の修正を重ねることで、児童の自分で決める力や自分で食べる力を高めることにつながった。
- 児童のわずかな表現を読み取り、気持ちの表現を待つ姿勢は、食事指導以外の指導場面や他の児童とのかかわりにも生かされるようになった。
- 支援シートを活用して情報を共有することにより、学級や自立活動部の教師と連携して食事指導に取り組むことができた。多面的な視点から食事指導を見直すことで、より児童の気持ちの表現や摂食機能の実態に添った指導へ修正することにつながった。

2 課題

- 食事指導支援Bシートは、手だての導きにくさ、指導計画が二枚になってしまうことなどの使いにくさがあるため、内容や活用方法について改良を行う必要がある。
- 食事指導のさらなる充実につなげるためには、教師間による共有・連携だけでなく、家庭や医療など他の職種との共有・連携を図っていくことが必要である。

VI 研究の内容

1 自分で決めて自分で食べる力を高める食事指導とは

(1) 本研究における食べることの困難とは

食べることの困難は二つある。第一は、介助により食べることによって生じる、介助者との意思疎通の困難である。音声言語を持たず、身体の動きに制限がある場合、気持ちを表現する手段が限られる。介助する教師が児童の気持ちを読み取ることができず、児童の気持ちに添わない、受け身の食事になりやすいことが課題となる。第二は、口唇を閉じて食べ物を取り込み、かんで飲み込むといった一連の動作における困難、つまり、摂食機能上の困難である。摂食機能上の困難には、不適切な介助や食形態が合わないことによる誤学習が主な原因となる、口を開け過ぎる、丸飲み込みをするといった困難（異常パターン）も含まれる。異常パターンは自食をしている児童に多く見られ、問題が表面化しにくいことも課題である。摂食機能上の困難は、誤嚥（気管にだ液や食べ物が入ってしまうこと）や窒息といった命の危険にもつながる。適切な介助により摂食機能を高め、正しい方法で、自分で食べる力を高めることが求められる。

(2) 自分で決めて自分で食べるとは

自分で決めて自分で食べるとは、自食することのみを意味するものではない。食べるかどうか、何を食べたいのかを決めて表情や口の動きなどにより表現したり、口唇や舌を自分の力で動かして食べ物を取り込んだりかんだりすることを言う。介助を受けて食べる行為であっても、受け身的に食べるのではなく、気持ちを表現し、自分で口唇や舌を動かして主体的に食べることである。

2 先行研究の分析結果と研究とのつながり

「大阪府下の肢体不自由養護学校における給食指導」（真木・山下、2004）によると、府内の肢体不自由特別支援学校の在籍児童生徒で、普通食を食べている者はほぼ半数にとどまること、また4割以上が全介助を受けていることが明らかになった。また、約半数に咀嚼の、3割程度に嚥下の問題が認められる。このような児童生徒の食事指導に当たる教師の大多数が、安全に指導することへの不安や心理的・肉体的な負担を感じて指導に当たっている。そのため、介助方法や嚥下の仕組みなどに関する情報提供や研修の機会を強く求めていることが確認された。

「介助者に対する摂食指導の効果と要因に関する事例研究」（堅田、1996）には、対象児の実態やニーズを踏まえた摂食姿勢や介助法、食形態などの有効な手だてが示されている。また、食事指導を子どもの能動的な活動を引き出す場、介助者とのコミュニケーションを高める場とするためには、技術的な視点だけでなく、介助者の意識改革を図っていくことの重要性が述べられている。

堅田の事例研究をはじめ、多くの研究や書籍において、摂食機能の発達や介助に関する知識とともに、気持ちに添った指導を行うことの大切さについて情報提供がなされている。これらの食事指導に関する情報を、教師が食事指導の実践に十分に生かすことができていない状況がある。そこで、これらの先行研究や書籍による情報から、必要なものを整理して表にまとめた支援シートを作成することを考えた。単に摂食技術の向上を目指すのではなく、教師が児童の気持ちに添いながら、食事指導に取り組むことを目指し、気持ちの表現にも視点を当てた。

3 研究協力校における実態調査の分析結果

(1) 調査の概要

実施時期	平成25年7月～平成25年8月
対 象	研究協力校 肢体不自由特別支援学校 1校
内 容 調査方法	・学校の摂食指導の実態調査：自記式質問紙法 保健給食部の教師や自立活動部の教師など1名が回答する。 ・教師の摂食指導に対する意識調査：選択式質問紙法 食事指導にかかわる教師93名が回答する。

(2) 分析結果

食事指導にかかわる93名の教師から回答を得た。93名中、41名（44％）の教師が肢体不自由特別支援学校における食事指導の経験年数が3年未満であることが分かった（図1）。研修については、校内で新転任者向けの摂食指導研修を行っており、ほぼ全員が1回は基本研修（スプーンの運び方や食形態などの摂食指導の基本事項）を受けている。一方で、摂食機能の発達や仕組みに関する知識・技能を得るための専門研修については、受講経験がない教師が大半を占める。経験年数1年未満の教師は100％、1年以上3年未満の教師は79％、3年以上5年未満の教師は42％、5年以上の教師は55％が受講経験がない（図2）。摂食機能の発達や仕組みについて、詳しく学ぶ機会を得られないまま、食事指導に当たる教師が多い現状が明らかになった。その結果、図3に示すとおり、摂食機能の向上（63％）、適切な実態把握（47％）、安全な介助（44％）が難しいと感じる項目の上位に挙げられ、適切な実態把握に基づいた、摂食機能を高めるための指導の難しさが課題となっている。コミュニケーションを難しいと感じる項目として挙げた教師は22％であった。コミュニケーションについて難しいと感じつつも、摂食機能面、介助面により関心が向けられている現状が推測された。

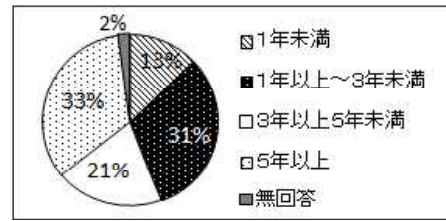


図1 教師の食事指導経験年数

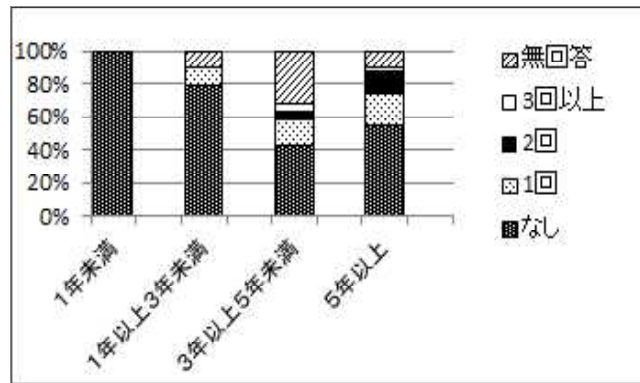


図2 食事指導経験年数と専門研修の受講回数

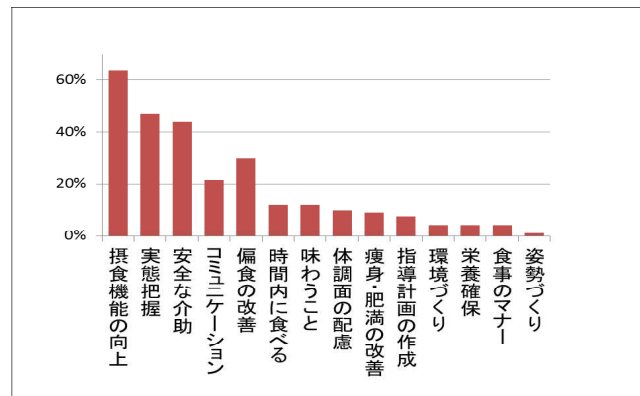


図3 教師が「難しい」と感じている項目

注：3つまで複数回答

4 気持ちの表現と摂食機能の発達に視点を当てた食事指導支援シートとは

(1) 摂食機能とは

食べ物を口の中に取り込み、かみ砕いてだ液と混ぜて飲み込みやすい状態にしてから（咀嚼）、飲み込む働き（嚥下）のことである。口唇や舌、歯、頬といった器官と、口やのどの周辺の筋肉や骨、神経が協調して働くことで、取り込みから咀嚼、嚥下の動作がスムーズにでき、食べ物を食道へと送り込むことができる。身体機能の障害による麻痺や緊張によりこれらの器官や筋肉が十分に働かないと、口を閉じて食べ物を取り込むことや、咀嚼することができなくなる。また、嚥下時に食べ物が食道にスムーズに送れず、のどにたまったり気管に入ってしまったりする（誤嚥）。このように摂食機能が働かなくなってしまうことを摂食機能障害と言う。

(2) 摂食機能を高める指導とは

児童が自分で口を閉じて取り込もうとする動きや、咀嚼する動きなどを助け、引き出す介助を行い、取り込む、咀嚼する力を高めたり、誤嚥せずに力強く嚥下する力を高めたりする指導のことである。具体的には介助者が顎や口唇に近い部分に触れて、口を閉じる動きを助けたり、スプーンの運び方を工夫したり、言葉がけをしたりすることにより進める。咀嚼する力に合わせて、食形態（かまなくてもよい初期食、弱い力でも押しつぶすことができる中期食などがある）を選び、食器、食具の選択や姿勢にも配慮することが必要である。

(3) 食事指導支援シートとは

食事指導支援Aシート（以下Aシートと記す）と食事指導支援Bシート（以下Bシートと記す）の二種類のシートから構成される。Aシート（図4）は発達過程表により、気持ちの表現や摂食機能の発達の全体像を確認するためのシートである。食事場面で必要となる気持ちの表現とこれらの表現が高まっていく過程を確認することができる。摂食機能については、摂食機能準備期から摂食機能完了期まで、各過程における舌や口角の動きと各過程で獲得が期待される機能が示されている。児童がどの発達過程に位置するのかを確認し、獲得を目指す摂食機能を確認することができる。

Bシート（図5）は、気持ちの表現と摂食機能について、指導計画を作成するためのシートである。気持ちの表現用シートと摂食機能用シート（取り込む機能用、嚥下機能用、咀嚼機能用、自食機能用）の計5種類のシートがある。気持ちの表現と摂食機能の各機能について、発達段階表と段階ごとに必要な手だてを示した表からなる。この表から児童の実態を把握し、次に目指す段階（目標）と手だてを導き、指導計画の欄に記入する。評価と指導計画修正の過程においても、Bシートを活用する。

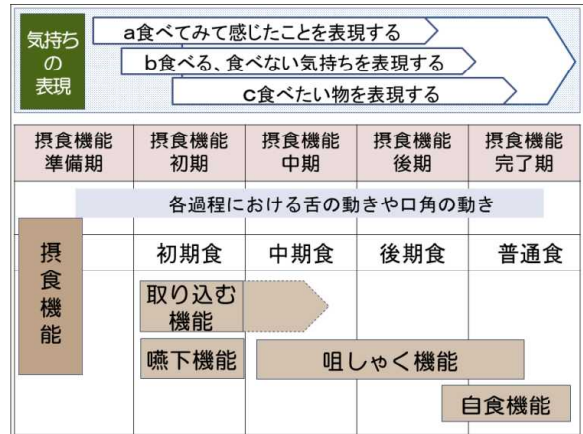


図4 食事指導支援Aシート（発達過程表の部分）

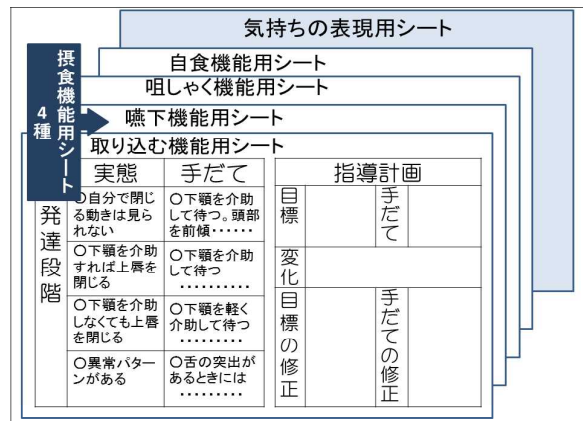
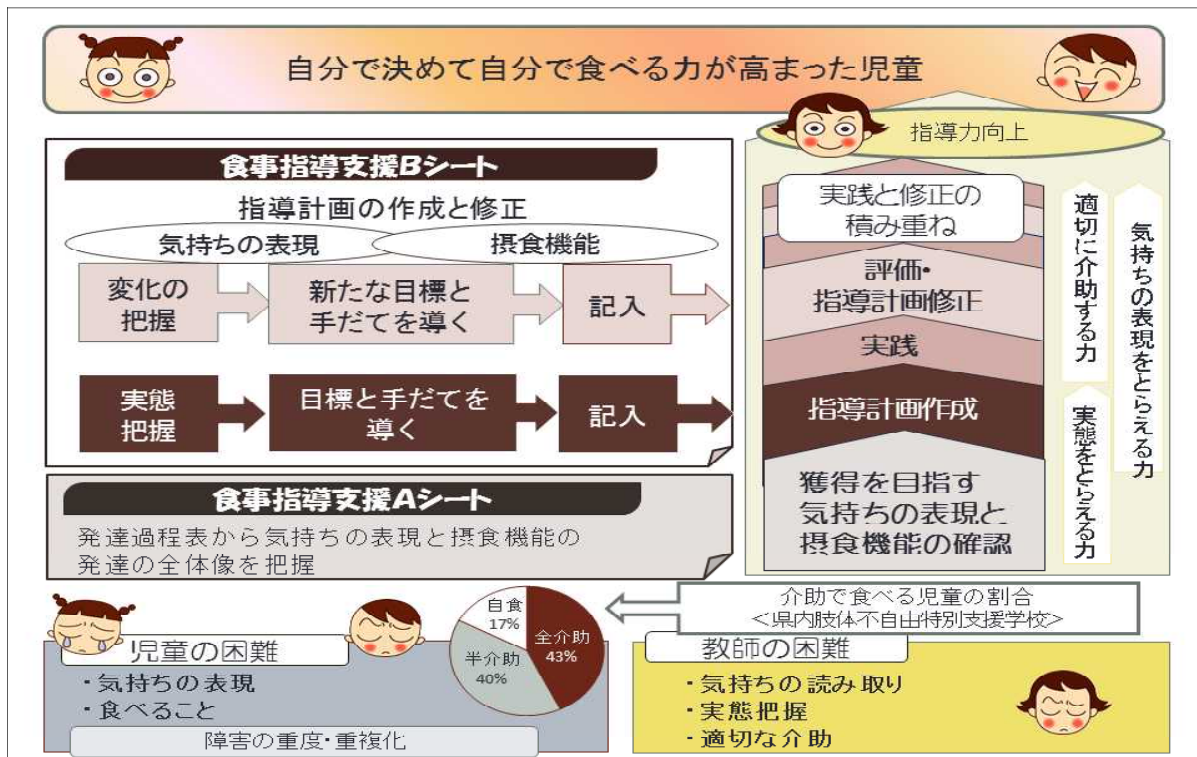


図5 食事指導支援Bシート（シートの構造）

5 研究構想図



Ⅶ 実践の計画と方法

1 研究実践の概要

対 象	研究協力校			
実践期間	平成25年9月～平成25年11月			
実践形態	<ul style="list-style-type: none"> ・対象児3名を抽出し、児童の担任の教師（肢体不自由特別支援学校における食事指導経験年数は2年未満）が指導計画作成、指導計画に基づく実践、1回目評価・指導計画修正、2回目評価・指導計画修正を行う。学級の他の教師も指導計画作成と修正、評価の過程にかかわり、児童の実態や変化のとらえ方、目標や手だての設定と修正について、必要に応じて意見を述べる。 ・自立活動部の教師は、指導計画作成と修正、評価の過程にかかわり、児童の実態や変化のとらえ方、目標や手だての設定と修正について、必要に応じて指導・助言を行う。指導場面においては、巡回指導時に、姿勢、介助の方法について必要に応じて指導・助言を行う。 ・長期研修員は、指導計画作成と修正、評価の過程にかかわり、指導に当たる担任の教師の実態や変化のとらえ方、目標や手だての設定と修正について確認する。支援シートから導いた点と、自立活動部の教師の指導・助言から導いた点を把握する。食事指導の場面を、対象児1名につき、週に1～2回、1回に20～30分程度観察を行う。指導の状況や対象児の様子を観察し記録をとる。観察時はビデオ撮影を行う。 			
実践計画		A児	B児	C児
	指導計画作成	9月11日	9月10日	9月20日
	実践	9月		
	1回目評価・指導計画修正	10月4日	10月9日	10月2日
	実践	10月		
	2回目評価・指導計画修正	11月8日	11月5日	11月6日

2 対象児の実態

A児	<ul style="list-style-type: none"> ・摂食機能初期、介助により食べる。取り込み時から嚥下時まで、口が開いていることが多い。取り込む機能、嚥下機能に課題がある。好きな物のときには、口の動きで気持ちを表現する。食べたくないときには口を開けないことや上体を反らせることで伝える。口に食べ物が入ってからスプーンをかんで「おいしくない」「嫌だ」という気持ちを表現することもある。
B児	<ul style="list-style-type: none"> ・摂食機能中期、介助により食べるときと、自食により食べるときがある。自食するとき、食べ物を口の奥に入れすぎてしまい、咀嚼することができず、首を後ろに反らせてのどに送ることがある。咀嚼機能、自食時の取り込み方に課題がある。好きなパンについては、手をのばしてつかむことで、食べたい気持ちを表現する。
C児	<ul style="list-style-type: none"> ・摂食機能後期、介助により食べる。取り込むときに口唇の閉じ方が弱い。舌の横への動きがあるが、肉類などかたい物をかむことに困難がある。取り込む機能、咀嚼機能に課題がある。おいしいとき、好きな物のときには、口の動きと身体の動きで気持ちを表現する。食事中ももっと欲しい気持ちを表現するように、声を出すことがある。

3 検証計画

項目	検証の観点	検証の方法
見 通 し 1	<p>支援シートを活用した指導計画作成</p> <p>支援シートを活用することにより、気持ちの表現や摂食機能の発達をとらえる視点が分かり、適切な実態把握から目標、手だてを導くことにつながったか。</p>	Bシートにより作成した指導計画から、実態に応じた目標、手だての設定ができていないかを分析する。

見 通 し 2	支援シートを活用した食事指導の実践 児童の気持ちの表現や食べ方を的確にとらえながら指導の修正を重ねたことで、児童の自分で決めて気持ちを表現する力や自分で食べる力を高めることがあったか。	Bシートにより作成した指導計画の修正過程やビデオ映像を分析し、担任の教師の指導の変化と児童の変化をとらえる。
見 通 し 3	支援シートを活用した実践の検証 検証の過程では、支援シートにより作成した指導計画の修正過程やビデオ映像の分析による担任の教師の指導の変化と児童の変化をとらえることで、支援シートの有効性を検証する。	見通し1、2の分析結果及び、実践にかかわった担任の教師から聞き取った意見により分析する。

Ⅷ 研究の結果と考察

支援シートを活用して、担任の教師（以下、指導に当たる担任の教師を教師と記す）が指導計画を作成し、食事指導に取り組んだ。評価・指導計画修正過程においても支援シートを活用し、指導の修正を重ねることで、以下の結果が得られた。

1 支援シートを活用した指導計画の作成

(1) 結果

① A児指導計画作成

ア 摂食機能の発達過程確認

Aシートにより、摂食機能の発達過程は摂食機能初期であること、取り込む機能が課題であることを確認した。

イ 気持ちの表現の指導計画

気持ちの表現用シートを活用して教師が指導計画を作成した。図6に示すように、a 食べてみて感じたことを表現すること、b 食べる、食べない（拒否）気持ちを表現することができることを確認した。特にbの食べない気持ちを表現することが明確であることに着目した。拒否の表現手段について、上体を反らせたり、スプーンをかんだりすることが多く見られること、また、表情や発声、口を開けないことによる表現もあることを確認した。上体を反らず、スプーンをかむといったA児にとって負担となる表現を減らしたいという願いから、表情や発声、口の動きによる表現がより明確になることを目標として設定した。表情や発声、口の動きによる表現を見逃さずに読み取り、A児の拒否の気持ちに丁寧に向き合うことで、上体を反らず、スプーンをかむといった表現が減っていくのではないかと考え、手だてを設定した。図7に、気持ちの表現用シートに記入した指導計画を示す。

気持ちの表現	a 食べてみて感じたことを表現する。「好き」「嫌だ」など b 食べる、食べない（拒否）気持ちを表現する。 c 食べたい物を表現する。
児童生徒の気持ちの表現の実態（当てはまるものに○をつけたり、具体的な姿を書き込んだりする）	
a の 表 現	<表現手段> ・表情で ・口の動きで ・発声で ・身体の緊張で ・身体の動きで（身体を反らせるなど） ・スプーンをかむことで（おいしくないときの表現として） ・泣くことで ・言葉で ・他の手段で（おいしくないときには上体を反らせたりスプーンをかんだりする。好きなものときには、口の動きがよくなる。
b の 表 現 実 態 表	<表現手段> ・表情で ・口の閉鎖で ・発声で ・身体の緊張で ・泣くことで ・身体の動きで（身体を反らせる、食べたいときに手を伸ばす、顔を向ける、運ぶなど）他の手段で（食べたくない時に上体を反らせることがある。
c の 表 現	<表現手段> ・表情で ・発声で ・視線で ・言葉で ・身体の動きで（食べたい物に手を伸ばす、顔を向けるなど） ・他の手段で（

図6 A児気持ちの表現用シートを活用した実態把握

気持ちの表現指導計画		
目 標	・表情や口の動き、発声による気持ちの表現がより明確になる。 ・スプーンをかむ、身体を反らす表現が減る。	手だて ・配慮事項 ・表情や発声による表現を見逃さずに読み取り、応えたり賞賛したりしていく。 ・特に拒否の表現を大切に、丁寧に受け止める。 ・スプーンをかんだときや身体を反らせたときには発声などで表現するよう伝えていく。

図7 A児気持ちの表現用シートに記入した指導計画

ウ 取り込む機能の指導計画

取り込む機能用シートを活用して、教師が指導計画を作成した。図8に示すとおり、取り込む機能の発達段階表から、下顎を介助すれば上唇を閉じる動きがあるが、閉じ方が弱いことを確認した。実態から、下顎介助を受けることで口唇を強く閉じることを目標として設定した。手だては取り込む機能用シートの手だて欄より、口唇を閉じたときに、スプーンを止めて、介助を強めて、A児が閉じたことを意識できるようにすること、口唇を閉じたときにしっかりと賞賛して伝えることを設定した。また、A児は体調や覚醒度により食事を摂ることが難しくなるので、体調がよいときに目標達成を目指すことを確認した。図9に、取り込む機能用シートに記入した指導計画を示す。

児童生徒の実態（当てはまる実態に○をつけたり具体的な姿を書き込んだりする）	手だて
○自分で閉じる動きはほとんど見られない。下顎を介助して上唇を閉じる動きが見られない。 ○下顎（下唇）を介助すれば、自分で上唇を閉じる動きがある。 ・閉じ方が弱い。 ・閉じ方が強くなる。	・下顎を少し介助した状態で待つ。言葉がけをして「バックンだよ」など自分から閉じるのを促す。上唇が閉じない、あるいは、閉じ方が弱いときには、介助の力を少し強くする。 ・児童生徒が強く閉じてスプーンをはさむことを意識できるよう、閉じたところで少し止めてから、真っ直ぐにスプーンを引き抜く。 ・閉じたときには、しっかりと賞賛して伝える。 ・頭部を少し前傾させることで、上唇を閉じる動きが出やすくなる。 ・児童生徒の閉じる動きに合わせて、少しの介助だけ、言葉がけだけにしていく。

図8 A児取り込む機能用シートを活用した指導計画作成

取り込む機能指導計画	
目標 ・体調がよいときに、下顎介助を受けることで、口唇を閉じることができるようになる。	手だて ・A児が強く閉じてスプーンをはさむことを意識できるよう、介助の力を強めて、少し止めてから、スプーンを真っ直ぐに引き抜く。 ・できたときに言葉がけや賞賛をする。

図9 A児取り込む機能用シートに記入した指導計画

② B児指導計画作成

ア 摂食機能の発達過程確認

Aシートにより、摂食機能の発達過程は摂食機能中期であること、咀嚼機能が課題であることを確認した。

イ 気持ちの表現の指導計画

気持ちの表現用シートを活用して教師が指導計画を作成した。図10に示すように、口の開閉や顔を背けることなどにより、b食べる、食べない（拒否）気持ちを表現することができること、パンはc食べたい物を表現することができることを確認した。B児が自食もしていることと現在の気持ちの表現の実態から、スプーンを握って口に運ぶことにより、パン以外の食べ物についても、食べるという気持ちを表現することを目標として設定した。一口量をのせたスプーンを提示し、気持ちを尋ねることを手だてとして設定した。

ウ 咀嚼機能の指導計画

咀嚼機能用シートを活用して教師が指導計画を作成した。図11に示すとおり、咀嚼機能の発達段階表から、舌の上下の動きで押しつぶす段階であること、わずかに舌の左側への動きが見られることを確認し、舌の左側への動きがさらに高まることを目標として設定した。手だては、咀嚼機能用シートの手だて欄より、「③スティック状の食べ物を使って練習する」を選択し、スティック状のパンを使って、舌の横への動きとかむ動きを引き出す方法を設定した。

気持ちの表現	児童生徒の気持ちの表現の実態（当てはまるものに○をつけたり、具体的な姿を書き込んだりする）
a 食べてみて感じたことを表現する。（「好き」「嫌い」など） b 食べる、食べない（拒否）気持ちを表現する。 c 食べたい物を表現する。	a <表現手段> ・表情で ・口の動きで ・発声で ・身体の緊張で ・身体の動きで（身体を反らせるなど） ・スプーンをかむことで（おいしくないときの表現として） ・泣くことで ・言葉で ・他の手段で（ ） b <表現手段> ・表情で ・口の開閉で ・発声で ・身体の緊張で ・泣くことで ・言葉で ・身体の動きで（身体を反らせる、食べたいときに手を伸ばす、顔を向ける） 顔を背ける、スプーンを口に運ぶなど、他の手段で（手で扱う） c <表現手段> ・表情で ・言葉で ・身体の動きで（食べたい物）手を伸ばす、顔を向けるなど、他の手段で（ ） ・B児の実態を書き加えた。大好きなパンは声を出しながら手をつかみ、食べたい気持ちを伝える。

図10 B児気持ちの表現用シートを活用した実態把握

児童生徒の実態（当てはまる実態に○をつけたり具体的な姿を書き込んだりする）	手だて
《摂食機能初期》 ・ペースト状の食べ物を、舌の前後の動きで咽頭に送る。 ・舌の上下の動きが出てくる。	
《摂食機能中期》 ・押しつぶし機能獲得 ・丸形のある柔らかい食べ物を、舌の上下の動きで押しつぶす。 ・舌の横への動きが出てくる。左側への動きがわずかに見られる。	①咀嚼を高めるための手だて ①まず最初に取り込む機能を見直す。 ②一口量をかみ取って取り込む。 ③スティック状の食べ物を使って練習する。
《摂食機能後期》 ・すりつぶす ・柔らかめの物であれば、舌の左右の動きで押しつぶす。 ・やや固さのある物でも、舌の左右の動きで押しつぶす。	
《摂食機能完了期》 ・固い物、かみ切りにくい物への配慮が必要であるが、食べ物を歯でかみ砕き、唾液と混ぜて飲み込みやすい状態にする。	

図11 B児咀嚼機能用シートを活用した指導計画作成

③ C児指導計画作成

ア 摂食機能の発達過程確認

Aシートにより、摂食機能の発達過程は摂食機能後期であること、取り込む機能と咀嚼機能に課題があることを確認した。

イ 気持ちの表現の指導計画

気持ちの表現用シートを活用して、教師が指導計画を作成した。図12に示すように、c 食べない(拒否)気持ちを表現することがあることを確認した。C児の拒否の理由を明確にとらえていなかったため、これを課題としてとらえ、教師がC児の気持ちを理解できるようになること(教師の目標)、C児の表現がより明確になることを目標として設定した。C児の拒否があったときに、別の物を勧めたり、介助の手を外してみたりして、C児の気持ちに丁寧に向き合うことを手だてとして設定した。

ウ 取り込む機能の指導計画

まずは、取り込む機能から取り組むことにし、取り込む機能用シートを活用して、教師が指導計画を作成した。図13に示すとおり、取り込む機能の発達段階表から、下顎の介助をしなくても、自分で閉じる動きがあるが、閉じ方が弱いことを確認した。実態から口唇を強く閉じるようになることを目標として設定した。手だては、取り込む機能用シートの手だて欄より、下顎介助が必要であることを確認した。C児が自分で口唇を閉じたときに、介助の力を加えて、強く閉じる動きを引き出すことを設定した。

気持ちの表現	a 食べてみて感じたことを表現する。(「好き」「嫌だ」など) b 食べる、食べない(拒否)気持ちを表現する。 c 食べたし物を表現する。
児童生徒の気持ちの表現の実態 (当てはまるものに○をつけたり、具体的な実態を書き込んだりする)	
気持ちの表現	a <表現手段> ・表情で 口の動き で ・発声で ・身体の緊張で ・身体の動きで(身体を反らせるなど) ・スプーンをかむことで(おいしくないときの表現として) ・泣くことで ・言葉で ・他の手段で(おいしいときには、口の動きがよくなる。表情の変化はあまり確認できない。)
表現実態表	b <表現手段> ・表情で 口の開閉 で ・発声で ・身体の緊張で ・泣くことで ・身体の動きで(身体を反らせる、食べたいときに手を伸ばす、 顔を向ける、顔を背ける、スプーンを口に運ぶ など) ・ 顔を背けることがあるが、食べものが嫌なのか、介助が嫌なのか担任が把握できないことがある。介助が遅れたときに、催促するように声を出すことがある。
表現	c <表現手段> ・表情で ・発声で ・視線で ・言葉で ・身体の動きで(食べたい物に手を伸ばす、顔を向けるなど) ・他の手段で()

図12 C児気持ちの表現用シートを活用した実態把握

児童生徒の実態 (当てはまる実態に○をつけたり具体的な実態を書き込んだりする)	手だて
取り込む機能の発達段階	○下顎(下唇)を介助すれば、自分で上唇を閉じる動きがある。
○下顎(下唇)を介助しなくても、自分で(上下の)口唇を閉じる動きがある。	・閉じ方が弱いときには、下顎を意識できるよう、触れて支える介助を行う。 ・触れて支える介助をした状態で待つ。言葉がけをして自分から閉じるのを促す。閉じ方が弱い時には、介助の力を少し加える。
・閉じ方が弱い。	・児童生徒が強く閉じてスプーンをはさむことを意識できるよう、閉じたところで少し止めてから、真っ直ぐにスプーンを引き抜く。
一 閉じ方が強くなる。 ← 目標に設定	・強く閉じたときには、しっかりと賞賛して伝える。
一 強く閉じる回数が増える。	・児童生徒の閉じる強さに合わせて、触れているだけ、言葉がけだけにしていく。
○口唇を介助しなくても、自分で強く口唇を閉じて取り込む。	

図13 C児取り込む機能用シートを活用した指導計画作成

(2) 考察

気持ちの表現については、教師が実態を把握するに当たり、気持ちの表現用シートに示された気持ちの表現 a ~ c (図6、図10、図12)により、児童が自分で決めて食べるためにどのような気持ちの表現に着目すればよいか、視点を明確にして実態把握に取り組むことができた。a ~ c の気持ちの表現について、例示された表現手段をチェックすることで、児童ができていない表現と表現手段、できていない表現を把握することができた。気持ちの表現における課題を明確にすることができ、目標の設定につながった。手だてについては、Bシートの手だて欄に示されたものを参考に、学級の他の教師からの意見をj得て、個々の児童にとって取り組みやすい手だてを設定した。

摂食機能については、Bシートの発達段階表を活用することで、A児、C児の口唇の閉じ方がどの段階にあるのか、B児の舌の動きやかむ力がどの段階にあるのか確認することができた。発達段階表を活用することで次に目指す段階も明らかになり、目標の設定につながった。Bシートの手だて欄に示されたものを参考に、個々に合った手だてを考え、導くことができた。

教師がAシートの発達過程表やBシートの発達段階表を活用することで、気持ちの表現、摂食機能ともに、発達の基本的な理解に基づいて、児童の実態をとらえることができた。視点を明確にし、今できること、課題となっていることをとらえることで、実態に応じた、指導につながる具体的な目標、手だての設定につながったと考える。

② A児の自分で決めて自分で食べる力の向上

教師が表情や口の動きによる拒否の表現を読み取って、A児の拒否にこたえたときには、上体を反らせることが見られなかった。表情を硬くすることや口を開けないことで拒否の気持ちを表現することができた。また、食べたいときには自ら口を開けるとともに、口唇を閉じて取り込む動きも明確になり、食べるという気持ちを表現することがより明確になった。

取り込む機能については、体調や覚醒度がよいときには、弱い介助でも強く口唇を閉じて取り込むことができた。口唇を強く閉じて取り込めたときには、その後の舌の動きと嚥下の動きもスムーズになり、むせることもほとんど見られなかった。

③ B児食事指導の経過

ア 気持ちの表現を高める指導

教師が一口量を盛ったスプーンを提示して気持ちを尋ねることに取り組んだ。B児がスプーンを握って口に運ぶ（あるいはスプーンを握らない）ことで、食べる（食べない）気持ちを表現することにつながった。B児の気持ちの表現の変化を受けて、どれを食べたいかという気持ちを表現することにも取り組むことを話し合い、目標と手だての修正を行った。提示する食べ物を一種から二種、三種に増やし、ビデオ映像も活用して、複数の教師でB児の視線や手の動きからB児の決める様子を確認しながら取り組んだ。

イ 咀嚼機能を高める指導

教師が主にB児の好きなパンを使って指導に取り組んだ。長期研修員による観察も週に2～3回、パンがメニューにある日に行った。図17に示すように、手だて③（スティック状のパンをかみ取る方法を試みる。図17）を臼歯のやや内側から臼歯上に入れることにより、舌の横への動きやかむ動きを引き出す）に取り組んだが、うまくできず、咀嚼機能シートを活用して手だて②を導いた（図18）。手だて②（前歯で一口量をかみ取ることにより、舌の横への動きを引き出す）に取り組むに当たっては、教師がB児の舌の動きを見ながら、パンの大きさやかたさ、入れる位置などを調節した。B児の舌の動きをより引き出せるよう、一口ごとに細かな修正を重ねた。

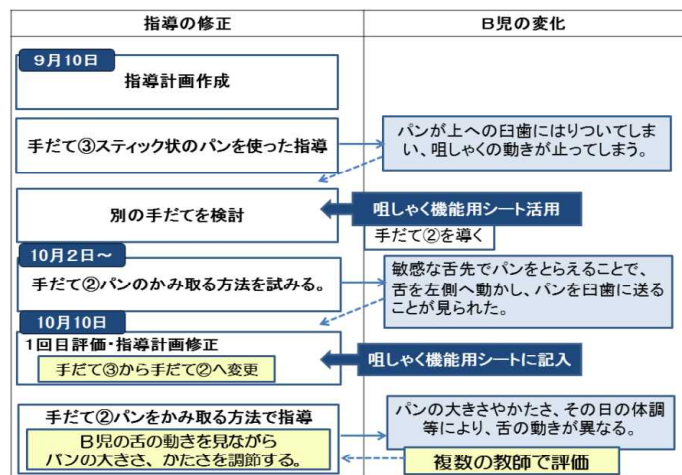


図17 B児咀嚼機能を高める指導 修正過程

注： 図中の手だて②、手だて③は咀嚼機能シートの手だて欄に示された手だてを指す。（図18参照）

④ B児の自分で決めて自分で食べる力の向上

気持ちの表現については、スプーンを自分で握って運ぶという行為により、パン以外の食べ物についても、食べるという気持ちを表現できるようになった。二種の食べ物を提示されて、何を食べるか決める場面では、最初は一方のパンだけを見てすぐに手を伸ばしていたが、両方をじっと見て考えてから手を伸ばすことが見られた。提示された物ではない別の物を要求することも見られるようになった。また、介助で勧めるときに、教師

児童生徒の実態 (当てはまる実態に○をつけたり具体的な姿を書き込んだりする)	手だて
《摂食機能初期》 ・ペースト状の食べ物を、舌の前後の動きで咽頭に送る。 ・舌の上下の動きが出てくる。	
《摂食機能中期》 押しつぶし機能獲 ・形のある柔らかい食べ物を、舌の上下の動きで押しつぶす。 ・舌の横への動きが出てくる。左側への動きがわずかに見られる。	手だて②を新たな手だてとして設定した。 取り込む機能を覚悟する。
《摂食機能後期》 すりつぶし機能獲 ・柔らかめの物であれば、舌の左右の動きで歯へ送り、すりつぶす。 ・やや固さのある物でも、舌の左右の動きで歯へ送り、すりつぶす。	②一口量をかみ取って取り込む。
《摂食機能完了期》 ・固い物、かみ切りにくい物への配慮が必要であるが、食べ物を歯でかみ砕き、だ液と混ぜて飲み込みやすい状態にする。	③スティック状の食べ物を使って練習する。

図18 B児咀嚼機能シートを活用した指導計画修正

また、介助で勧めるときに、教師

がスプーンを口の前で止めてB児に気持ちを尋ねるようになったことにより、勧められて拒否する場面や勧められてB児が食べることを決めてから食べる場面も増えた(図19)。

図20は、舌を使って食べ物を臼歯に送る動きや、臼歯に送った後に食べ物を処理する動きの変化を示したものである。食べ物を臼歯へ送る動きは9月25日と10月2日を比較すると、回数においては10月2日の方が少なくなっている。しかし、9月25日までは臼歯へ送るときに頭部を後屈して重力を使って送っていた。10月2日以降は頭部を後屈することはほとんど見られず、舌の動きだけで送れるようになるという変化がビデオ映像により確認された。かむ動きについては、指導開始後1か月間は、顎の上下の動きがわずかに見られる程度であったが、10月半ば以降、舌の動きを連動させた咀嚼の動きが少しずつ見られるようになり、10月22日、10月30日にはそれぞれ3回、4回確認された。10月30日の舌と臼歯を連動させた咀嚼4回のうち、1度だけ顎の旋回に近い動きがわずかに見られ、通常の咀嚼に近い動きがビデオ映像により確認された。

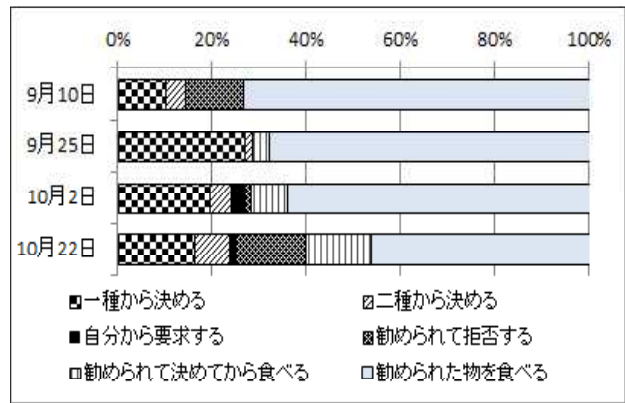


図19 B児が自分で決める場面の变化

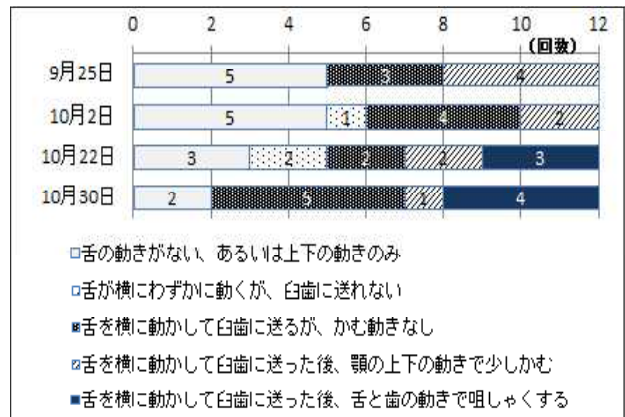


図20 B児咀嚼機能の変化

⑤ C児食事指導の経過

ア 気持ちの表現を高める指導

教師が指導を重ねる中で、C児の表情や口唇の動きを見ながら、口唇が開くの待ってスプーンを入れるようにしたり、「パッくんだよ」、「上手」などの言葉がけをしたりしながら、C児の気持ちに添って指導を重ねた。

イ 取り込む機能を高める指導

9月24日より指導を開始した。9月24日は教師が口唇を閉じるよう介助を行ったが、C児の自ら閉じる動きを引き出すことが難しかった。C児の口唇が十分に閉じる前にスプーンを抜くため、口唇や前歯に引っかけるようにして取り込ませる介助であった。9月26日には教師が、スプーンをC児の口に入れた状態で待ち、スプーンを抜くまでに間を取るようになるという変化が見られた。口にスプーンを入れた状態で言葉がけをしながら待ち、C児の口唇を閉じる動きが見られたときに、軽く介助の力を加えるようになった。(スプーンを口に入れてから抜くまでに要した時間の変化を表1に示す)。10月2日の1回目評価時に、ビデオ映像をもとに教師の指導の変化による、C児の取り込む機能の変化を確認し、わずかな待つ間をつくることの意味を確認した。また、このときに教師は、賞賛の言葉がけが少なかったことに気づき、手だてに追加した。

表1 スプーンを入れてから抜くまでに要した平均時間

9月24日	2.3秒
9月26日	3.9秒
10月1日	3.3秒
10月15日	3.0秒

⑥ C児の自分で決めて自分で食べる力の向上

取り込む機能については、図21に示すように、9月24日の指導開始直後は上唇がわずかに動く程度の取り込みが6割以上を占めていた。教師がスプーンを抜くまでの間を長く取るようになった9月26日には（12ページ表1参照）、すき間なく口唇を閉じる取り込みが4割に増えた。10月1日、10月15日は、教師がスプーンを抜くまでに要する時間が徐々に短くなっているが、口唇をすき間なく閉じて取り込むことや、さらに、長く（0.5秒以上）確実に閉じて取り込むことが増えた。

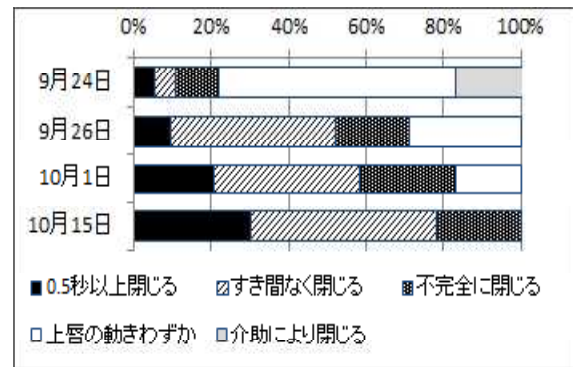


図21 C児取り込み時における口唇の閉じ方の変化

(2) 考察

食事指導の経過から、食事の一つ一つの場面で、教師が児童の表情の変化や発声、口唇や舌の動きをとらえながら、目標の達成に向けて指導の修正を重ねたことが分かる。また、一定期間において評価の機会を設けることで、複数の教師による多面的な視点で児童の変化をとらえるとともに、食事指導を見直すことができ、目標や手だてを修正することにつながった。その結果、対象児の自分で決める力、自分で食べる力は、以下のように変化した。

A児の表情や口唇の動きによる拒否の表現を、教師がスプーンを口に入れる前に見逃さずに読み取り、こたえるようになったことで、上体を反らせることやスプーンをかむといった表現をしなくても、拒否の気持ちを伝えることができるようになった。A児の表現手段が、より負担の少ない適切な表現に変わるとともに、A児自身が食べるかどうか決める場面が増えたと言える。取り込む機能については、教師が介助の強さや頭部の角度を調節し、A児の実態に添った介助へと修正を重ねたことで、口唇を閉じて取り込む力を高めることにつながった。また、A児が自分で食べると決めて食べたことが、食べる意欲につながり、口唇を閉じて取り込む力につながったと考える。

B児は、教師が一種あるいは、二種の食べ物を提示して気持ちを尋ねたことで、スプーンを握って口に運ぶことにより、食べるかどうか、何を食べるか決めて、気持ちを表現することができるようになった。特に二種の食べ物から決める場面において、最初は一方だけ見て決めていたが、両方を見て、考えてから決めるという変化が見られた。見比べて考えて決める力の向上を確認することができた。また、教師が介助で勧めるときに、口の前でスプーンを止めて待つようになったことで、B児が拒否の気持ちを表現したり、食べ物を見て、食べることを決めてから食べることができるようになった。自食場面だけでなく、介助場面においても、自分で決めて気持ちを表現する場面が増えたと言える。咀嚼機能については、舌を左側へ動かして食べ物を臼歯に送るとともに、その後の処理の方法にも変化が見られた。回数とともに質的にも自分で咀嚼して食べる力が高まったと言える。

C児は、教師がスプーンを口に入れる前に一度止めて待つようになったことで、食べるかどうかを決められるようになった。取り込む機能を高める指導においては、教師がC児の口唇を閉じる動きを待つようになった。2秒に満たないわずかな間が、C児の口唇の動きを引き出す上で大きな違いをもたらしたと言える。9月26日以降、スプーンを抜くまでに要する時間が短くなっているにもかかわらず、口唇を閉じる回数が増えている結果から、C児が口唇を閉じるまでに要した時間が短くなっていることが読み取れる。自分で口唇を閉じて自分の力で食べ物を取り込む力が高まったと言える。

3 支援シートを活用した実践の検証

(1) 結果

実践に当たった担任の教師3名に実践後のアンケートを実施したところ、表2に挙げた意見を得ることができた。アンケートには、支援シートを活用したことで、指導上変えた点・変わった点、感想・意見などを担任の教師が記入した。また、指導計画作成時や1回目、2回目評価時に、支援シートに関して担任の教師から得た意見も表2に加えた。

表2 実践に当たった担任の教師からの意見

<p>気持 ちの 表 現</p>	<p>○気持ちの表現に対する意識の向上 ・食事指導において、児童の気持ちの表現に意識を向けるようになった。</p> <p>○気持ちの表現をとらえる視点の獲得 ・表情や口の動きなど気持ちの表現を見るポイントが分かった。 ・児童の表情や動きをよく見るようになった。口の動き、視線、のどの動き、頬の動きなど細かく注目するようになった。</p> <p>○気持ちの表現を待ち、気持ちに添って指導すること ・小さな拒否を見落とすことがスプーンをかむ、身体を反らせるといった強い拒否につながっていたと思う。小さな拒否のときから対応できるようになったのは自分にとって大きな収穫である。 ・スプーンを口元で止めて、児童が自分の気持ちやタイミングで食べるのを待つようになった。 ・食べる、食べないだけでなく、どれを食べたいかを児童とのやりとりの中で確認するようになった。 ・拒否の表現に対して、食べ物に対する拒否だけでなく、身体の疲れ・不快といった視点からも考えるようになり、姿勢変換をしたり、休憩をとったりするようになった。</p>
<p>摂 食 機 能</p>	<p>○摂食機能の発達をとらえる視点の獲得 ・支援シートをもとに、児童の実態を把握できたのがよかった。それによって見通しをもって（発達の全体像を把握した上で）現在の実態を見ることができ、目標が決めやすかった。 ・資料や本は情報が多く分かりにくい、分かりやすい表で理解することができた。 ・咀嚼くを見る視点が分かり、舌の動きや口の中の食べ物の動きに注意が向くようになった。 ・これまで安全に配慮して指導を行っていたものの、様々な機能の発達段階を知らないまま指導を行っていた。今回、支援シートをもらったり、話をしたりすることで勉強になった。</p> <p>○口唇や舌の動きをとらえながら指導すること ・舌の動きやかむ動きを引き出しやすくするために、一口量をより意識するようになった。 ・口の中にたまっているからスープを勧める、食べにくそうだからパンをスープにつけて柔らかくするなど、児童の食べる様子から考えるようになった。 ・口唇を閉じてもさらに待つことで、強く閉じる動きが増えたように感じた。</p>
<p>食 事 指 導 全 体</p>	<p>○他の教師との共有・連携 ・実態をとらえる視点を得ることができたが、実際に児童の実態を的確にとらえて、この段階であると自信をもって決めることが難しく、学級の教師と相談したり、実践の中で確認したりした。</p> <p>○食事指導の見直し、取組の変化 ・自分自身の食事指導を見直して、どう改善していくかを考えるよい機会になった。 ・姿勢の取り方、気持ちの読み取り方、児童に合った介助の仕方など悩むことはたくさんあるが、指導の道筋が明確になったことで、そこを目指して試行錯誤して取り組めるようになった。 ・この取組を通して自分自身も介助に慣れて、児童が少しずつ力を発揮できるようになった。 ・児童に対して、今までより時間をかけてかかわる機会を得ることで、より身近に感じながらかかわることができた。</p> <p>○他児とのかかわり、他の指導場面への反映 ・他の児童とかかわるときにも、口唇の動きを見て指導したり、気持ちの表現を見て気持ちに添って指導したりするようになった。 ・食事以外の授業の場面でも、児童の気持ちの表現に目を向けるようになった。</p>

(2) 考察

VIII-1、2に挙げた指導計画の修正過程、教師の指導の変化と児童の変化、および表2の担任の教師からの意見により、支援シートの有効性を以下の三つの点から整理することができる。

第一に、気持ちの表現と摂食機能の発達の理解に基づいて、発達をとらえる視点を教師が得ることができた点で有効であったと言える。このことにより、実態に応じた目標設定が可能となるとともに、教師が児童の表情の変化や口唇、舌の動きをとらえながら指導に取り組むことができるようになった。児童の気持ちの表現や食べ方を見る目、的確にとらえる力を教師が得たことが大きい。これは、自分の指導上の課題を見だし、指導を修正することを可能にした。その結果、児童の自分で決める力や自分で食べる力を高めることにつながったと考える。

第二に、教師が食事指導において、児童の気持ちの表現に意識を向けるようになった点で有効であったと言える。気持ちの表現にも視点を当てて食事指導に取り組んだことで、食事指導が単に、摂食機能の向上を目指したのではなく、児童の気持ちに添い、気持ちの交流を図りながら進めるものになった。教師が児童の気持ちを尋ねるようになったこと、気持ちの表現や食べる動きを待つ間をつくるようになったことは、児童が自分で決めて気持ちを表現する力につながった。さらに、自分で食べたい物を決めて食べること、自分で食べると決めて食べることが、より意欲的に口唇を閉じて取り込む力、舌や歯を動かして咀嚼する力につながったと考える。

第三に、教師間の共有と連携を可能にした点で有効であったと言える。指導を修正する過程では、支援シートに示された手だてだけでは児童の多様な実態に対応できず、児童の性格や好み、身体の緊張や健康状態を考慮しながら教師が悩み、試行錯誤を重ねる場面が多く見られた。そのような場面で教師の指導を支えたのが、学級や自立活動部の教師による意見や助言であった。教師間の共有・連携により、多面的な視点で考えたことが、個々の児童の気持ちの表現や摂食機能の実態に添った指導へ修正することにつながったと考える。

Ⅸ 研究の成果と課題

1 成果

- 支援シートの活用により、教師が食事にかかわる気持ちの表現や摂食機能について理解を得るとともに、その発達をとらえる視点を得ることができた。児童の表情の変化や口唇の動きをとらえながら指導の修正を重ねたことで、児童の気持ちの表現や摂食機能を高めることができ、自分で決めて自分で食べる力を高めることにつながった。
- 気持ちの表現にも視点を当てた支援シート活用することで、教師が単に摂食機能の向上を目指すだけでなく、児童の気持ちに添って食事指導に取り組むようになった。児童のわずかな表現を読み取り、気持ちの表現を待つ姿勢は、食事指導以外の授業の場面や他の児童とのかかわりにも生かされるようになった。
- 支援シートを活用して情報を共有することにより、学級や自立活動部の教師と連携して食事指導に取り組むことができた。多面的な視点から食事指導を見直すことで、より児童の気持ちの表現や摂食機能の実態に添った指導へ修正することにつながった。

2 課題

(1) 支援シートにおける課題について

- Bシートは手だての導きにくさがある。教師が、手だて欄にある内容の中から、児童の実態に合った物を考えて必要な物を選び出さなければならない部分が多いことが課題である。また、取り込む場面と咀嚼場面といった摂食機能間の関連がつかみにくく、一つの場面のみに着目した指導になりやすいことが課題である。
- 気持ちの表現と摂食機能の二つの指導計画を作成することが教師にとって負担となる。

(2) 保護者や他職種との情報共有、連携について

本研究においては、支援シートの活用による教師の指導力向上に重点をおいたが、食事指導のさらなる充実を目指すためには、家庭や言語聴覚士、医師・看護師などの他職種との情報共有や連携を進めていくことが必要である。

X 今後の展望

1 支援シートの改良と活用について

課題を受けて、発達段階ごとに必要な手だてと配慮事項を具体的に示すとともに、摂食機能間の関連を明確に示すなど、Bシートの内容や形式の改良を行う。

活用に当たり、気持ちの表現用シートと摂食機能用シートにより、二種の指導計画を一度に作成することに負担があれば、気持ちの表現用シートから一種ずつ活用することを提案する。まずは、気持ちの表現を高める指導に取り組み、児童の食べたい気持ち、食べたときの気持ちに添いながら指導することができるようになったら、摂食機能を高める指導に取り組むことが望まれる。

また、個別の指導計画との関係において、支援シートの位置付けを整理し、肢体不自由特別支援学校だけでなく、知的障害特別支援学校なども含めた、学校における活用の在り方について検討していくことも必要である。

2 保護者や他職種との連携

Bシートの活用や授業参観、面談などの機会を活用して、家庭と学校で情報共有を図る。互いの情報を学校、家庭で生かしていくことで、児童の食事のさらなる充実につなげる。また、摂食機能の発達や医療面など、より専門的な視点から食事指導を見直し、さらなる改善を図っていくために、言語聴覚士や医師・看護師など学校内外の関係者との連携の在り方を検討する。

<参考文献>

- ・尾本 和彦 他 著 『摂食障害－指導援助の実際－』 社会福祉法人 日本肢体不自由児協会 (2010)
- ・堅田 利明 「介助者に対する摂食指導の効果と要因に関する事例研究」 『特殊教育学研究』 第33巻第5号 (1996)
- ・金子 芳洋 他 著 『食べる機能の障害 その考え方とリハビリテーション』 医師薬出版株式会社(2005)
- ・中島 知夏子 著 『摂食コミュニケーション』 有限会社オフィスSAKUTA(2004)
- ・芳賀 定 他 著 『食事に関して指導が必要な子どもに対する食事指導ガイドブック』 神奈川県教育委員会(2007)
- ・真木 葉子・山下 光 「大阪府下の肢体不自由養護学校における給食指導－アンケート調査による検討－」 『大阪教育大学紀要』 第IV部門 第53巻第1号 (2004)
- ・向井 美恵 他 著 『食べる機能をうながす食事』 医師薬出版株式会社(1995)

<研究協力校>

群馬県立あさひ養護学校

<研究協力者>

小学部教師 自立活動部の教師

<担当指導主事>

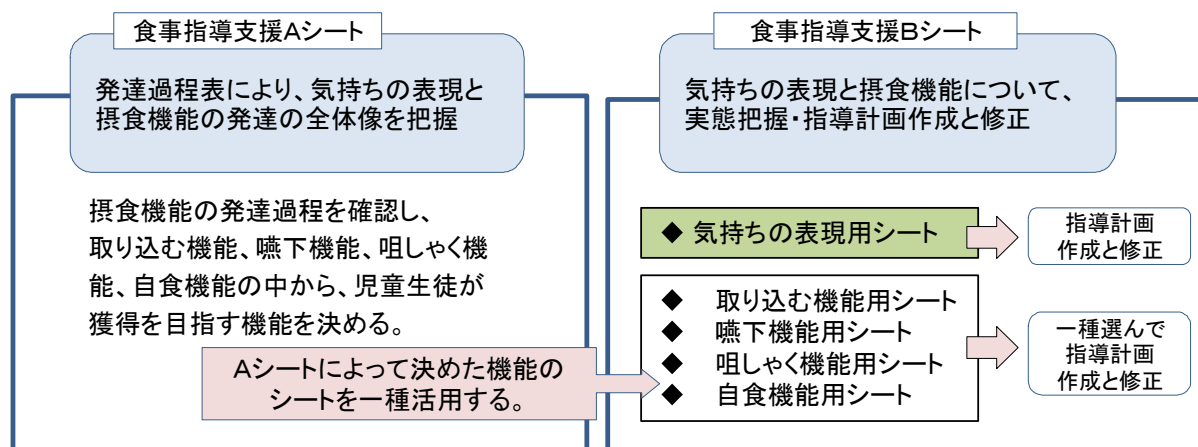
岡田 明子 竹田 美保

食事指導支援シート活用マニュアル

食事指導支援シートとは

- 食事指導支援シートは、児童生徒の自分で決めて自分で食べる力を高めることを目指し、教師の実践を支援するために作成したシートです。
- 教師が適切な実態把握に基づいて指導計画を作成すること、児童生徒の気持ちに添って摂食機能の実態に応じた指導を行うことを支援するためのシートです。
- 本シートにより、気持ちの表現と摂食機能の発達の仕組みを理解するとともに、発達をとらえる視点をすることができます。食事指導に当たって、児童生徒の気持ちの表現や食べ方をどのようにとらえ、何を目標として取り組めばよいかを示しています。また実態に応じた手だても示しています。
- 特別支援学校において、初めて食事指導に取り組むことになった教師、かかわっている児童生徒が、なかなか口を開けてくれない、食べるとむせてしまう、かまずに飲み込んでいる・・・など、どのように気持ちを読み取り、どのように介助をしたらよいか、悩みを感じている教師に活用してもらおうためのシートです。

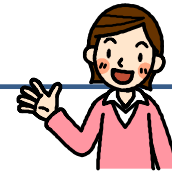
食事指導支援Aシートと食事指導支援Bシート



食事指導支援シート活用に当たって

- 気持ちの表現と摂食機能の二つの指導計画を一度に作成することに負担がある場合は、まずは、気持ちの表現用シートから活用し、無理のないよう取り組んでください。
- 発達段階や段階ごとの手だては、基本的な考え方を示したものです。実際の指導場面では、児童生徒の性格や好み、身体の緊張や健康状態などを含めた多様な実態に対応することが求められます。複数の教師の目で、児童生徒の実態やその変化、指導の在り方を見直し、児童生徒にあった食事指導へと修正を重ねてください。

食事指導支援シート活用マニュアル



食事指導支援Aシート～発達過程表～

発達過程表

1 発達の全体像を確認

・発達過程表から気持ちの表現と摂食機能の発達の全体像を確認する。

気持ちの表現	a 食べたくないという気持ち表現する	・より明確な表現になる。
	b 食べるという気持ち表現する	・より使いやすく、伝わりやすい手段で表現するようになる。
	c 食べたい物を決めて、表現する	・表現する内容が広がる。
	d 食べて感じた気持ちを表現する	

2 摂食機能の発達過程を確認

・舌や口角の動きから、児童の摂食機能の過程を確認する。
・獲得を目指す摂食機能を確認する。

	摂食機能準備期	摂食機能初期	摂食機能中期	摂食機能後期	摂食機能完了期
摂食機能	<ul style="list-style-type: none"> ・哺乳反射減退 ・指しゃぶり、玩具しゃぶりなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・舌は前後に動く 	<ul style="list-style-type: none"> ・舌は上下に動く ・口角は左右対称に動く 	<ul style="list-style-type: none"> ・舌が左右に動いて食べ物を歯に送れる ・口角が左右非対称に動く 	<ul style="list-style-type: none"> ・かたい物でも舌の左右の動きで歯に送り、すりつぶす
		<ul style="list-style-type: none"> ・ペースト食 ・とろみのついた水分 	<ul style="list-style-type: none"> ・中期食 ・絹ごし豆腐くらい 	<ul style="list-style-type: none"> ・後期食 ・野菜の煮物くらい 	<ul style="list-style-type: none"> ・普通食
	口から食べるための準備	<ul style="list-style-type: none"> 取り込む機能の獲得 嚥下機能の獲得 	<ul style="list-style-type: none"> 口唇閉鎖不完全、過開口、舌突出の場合あり 食べ物の形状によりむせる場合あり 		
			<ul style="list-style-type: none"> 咀嚼機能の獲得 押しつぶし機能獲得 	<ul style="list-style-type: none"> すりつぶし機能獲得 	<ul style="list-style-type: none"> 自食機能の獲得 手づかみ食べ機能獲得 食具食べ機能獲得

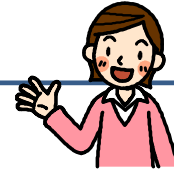
3 児童が抱えている困難と配慮事項を確認

<例>
・食事の前に身体を十分に緩める。
・肉類はかみにくいので、配慮が必要である。

◆ 児童生徒の実態によっては、取り込む機能と嚥下機能、取り込む機能と咀嚼機能、というように、複数の機能が課題となっている場合があります。口唇を閉じて確実に取り込むことは、咀嚼や嚥下に大きく影響します。複数の機能で迷ったら、まずは取り込む機能から一歩ずつ取り組んでみてください。

◆ 課題となっている摂食機能が分からない場合は、食事指導支援Bシートを使って、より細かく児童の実態を把握し、個々の課題を確認してください。

食事指導支援シート活用マニュアル



食事指導支援Bシート ～実態把握・指導計画作成～

- 1 実態把握**
・咀嚼機能の発達段階表から児童生徒の実態を把握する。
- 2 目標設定**
・実態から次に目指す段階を確認し、目標を設定する。
- 3 手だて設定**
・手だての欄から必要な手だてを導く。

咀嚼機能シート

児童生徒の実態（当てはまる実態に○をつけたり具体的な姿を書き込んだりする）	手だて
《摂食機能初期》 ・ペースト状の食べ物を、舌の前後の動きで咽頭 ・舌の上下の動きが出てくる。	
《摂食機能中期》 押しつぶし機能獲得 ・形のある柔らかい食べ物を、舌の上下の動きで押しつぶす。 ・舌の横への動きが出てくる。	舌の横への動き、かむ動きを高めるために ①一口量のかみ取り ②スティック状の食べ物を使った咀嚼練習
《摂食機能後期》 すりつぶし機能獲得 ・舌の左右の動きで食べ物を臼歯へ送り、上下の臼歯でかむ。 ・上下の臼歯の動きと、舌の動きを連動させてかむようになる。 （顎の動きが上下） ・やや固さのある物でも、舌の左右の動きで臼歯へ送り、上下の臼歯と舌の動きを連動させてすりつぶすことができる。 （顎の動きが臼歯の動き）	かむ動きを高めるために ③スティック状の食べ物を使った咀嚼練習
《摂食機能完了期》 ・固い物、かみ切りにくい物への配慮が必要であるが、食べ物を臼歯と舌の動きを連動させてかみ砕き、だ液と混ぜて飲み込みやすい状態にする。	咀嚼の様子をよく観察する

細かな実態を書き加える。

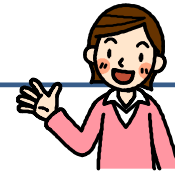
左側への動きがわずかに見られる

- 4 指導計画記入**
・設定した目標・手だてを記入する。

設定した指導計画に基づいて実践します。

咀嚼機能指導計画		
目標	・舌の横への動きが高まる。	手だて・配慮事項 ・パンを使って一口量のかみ取りに取組むことで、舌の横への動きを高める。
変化		
目標の修正		手だて等の修正
評価		

食事指導支援シート活用マニュアル



食事指導支援Bシート ～評価・指導計画修正～

- 5 変化の把握**
 ・咀嚼機能の発達段階表をもとに、児童生徒の変化を把握する。
- 6 目標の修正**
 ・児童生徒の変化を受けて、目標を修正する。
- 7 手だての修正**
 ・手だての欄から新たな手だてを導く。

咀嚼機能用シート

児童生徒の実態 (当てはまる実態に○をつけたり具体的な姿を書き込んだりする)	手だて
《摂食機能初期》 ・ペースト状の食べ物を、舌の前後の動きで咽頭に送る。 ・舌の上下の動きが出てくる。	
《摂食機能中期》 押しつぶし機能獲得 ・形のある柔らかい食べ物を、舌の上下の動きで押しつぶす。 ・舌の横への動きが出てくる。	舌の横への動き、かむ動きを高めるために ①一口量のかみ取り ②スティック状の食べ物を使った咀嚼練習
《摂食機能後期》 すりつぶし機能獲得 ・舌の左右の動きで食べ物を臼歯へ送り、上下の臼歯でかむ。 ・上下の臼歯の動きと、舌の動きも連動させてかむようになる。 (顎の動きが上下) 臼歯でかむ動きはあまり見られない ・やや固さのある物でも、舌の左右の動きで臼歯へ送り、上下の臼歯と舌の動きを連動させてすりつぶすことができる。 (顎の動きが臼磨の動き)	かむ動きを高めるために ③スティック状の食べ物を使った咀嚼練習
《摂食機能完了期》 ・固い物、かみ切りにくい物への配慮が必要であるが、食べ物を臼歯と舌の動きを連動させてかみ砕き、だ液と混ぜて飲み込みやすい状態にする。	咀嚼の様子をよく観察する

- 8 修正した指導計画の記入**
 ・児童生徒の変化と、修正した目標・手だてを記入する。
- 9 評価**
 ・年度末に最終的な評価を行い、記入する。

指導計画の修正は、学期末などに行いますが、児童の変化に応じて、細かな修正をその都度朱書きで加えてください。

咀嚼機能指導計画		
目標 ・舌の横への動きが高まる。	手だて ・パンを使って一口量のかみ取りに取り組むことで、舌の横への動きを高める。	配慮事項
変化 前歯でパンをかみとることで、舌先でとらえたパンを、舌を横に動かして臼歯に送ることができるようになってきた。今後パンの大きさやかたさを調節して、臼歯へ送る回数をより増やしていくことが課題である。また、パンを臼歯へ送った後に十分にかむことができず、パンが上顎にはりついてしまうことが多い。かむ力を高めることにも少しずつ取り組みたい。		
目標の修正 ・舌を横に動かしてパンを臼歯に送る回数が増える。 ・かむ力が高まる。	手だて等の修正	・一口量のかみ取りでは、咀嚼の状況により、パンのかたさを調節する。一口量が多くなりすぎないようにする。 ・スティック状のパンを使って、上下の臼歯でかむ動きを引き出す。
評価 一口量をかみ取ったときに、舌を横に動かしてパンを臼歯へ送る回数が増えてきた。スティック状のパンを使ったかむ練習を取り入れることで、上下の臼歯でかむ動きが出てきた。2月後半に臼歯でかむときに、舌の動きを連動させることが数回見られた。		

(1) 取り込む機能	スプーンにのった食べ物を見て確認し、口唇を閉じて、スプーンからこすり取って取り込む機能	
取り込む機能の発達階表	児童生徒の実態（当てはまる実態に○をつけたり具体的な姿を書き込んだりする）	手だて
	○自分で閉じる動きはほとんど見られない。下顎を介助しても上唇を閉じる動きが見られない。	<ul style="list-style-type: none"> 下顎を少し介助した状態で待つ。言葉がけをして（「バックンだよ」など）自分から閉じるのを促す。上唇が閉じない、あるいは、閉じ方が弱いときには、介助の力を少し強くする。 児童生徒が強く閉じてスプーンをはさむことを意識できるよう、閉じたところで少し止めてから、真っ直ぐにスプーンを引き抜く。 閉じたときには、しっかりと賞賛して伝える。 頭部を少し前傾させることで、上唇を閉じる動きが出やすくなる。 児童生徒の閉じる動きに合わせて、少しの介助だけ、言葉がけだけにしていく。 ※閉じる力が弱いときは、ボール部の平らなスプーンを使用する。
	○下顎（下唇）を介助すれば、自分で上唇を閉じる動きがある。	<ul style="list-style-type: none"> 閉じ方が弱い。 → 閉じ方が強くなる。 → 強く閉じる回数が増える。
	○下顎（下唇）を介助しなくても、自分で（上下の）口唇を閉じる動きがある。	<ul style="list-style-type: none"> 閉じ方が弱い。 → 閉じ方が強くなる。 → 強く閉じる回数が増える。
	○口唇を介助しなくても、自分で強く口唇を閉じて取り込む。	<ul style="list-style-type: none"> 閉じ方が弱いときには、下顎を意識できるよう、触れて支える介助を行う。 触れて支える介助をした状態で待つ。言葉がけをして自分から閉じるのを促す。閉じ方が弱い時には、介助の力を少し加える。 児童生徒が強く閉じてスプーンをはさむことを意識できるよう、閉じたところで少し止めてから、真っ直ぐにスプーンを引き抜く。 強く閉じたときには、しっかりと賞賛して伝える。 児童生徒の閉じる強さに合わせて、触れているだけ、言葉がけだけにしていく。 強く閉じることが安定してできるようになってきたら、触れて支える介助も少しずつ減らしていく。
	◎舌の突出が見られる。	<ul style="list-style-type: none"> 一度舌を取ってから、少し口を開けたところでスプーンを入れる。 日頃から喉周り、首周りの緊張を緩める。
	◎口を大きく開けすぎてしまう。	<ul style="list-style-type: none"> 大きく開いた口に食べ物を入れてしまうと、児童生徒が、自分から取り込もうとしなくなる。過開口を助長することにもなる。一度口を閉じて、下顎を介助しながらゆっくりと小さく開けるよう介助する。
	◎スプーンをかんでしまう。	<ul style="list-style-type: none"> かんでしまったときには、口唇を閉じて児童生徒が口唇を意識できるよう介助する。かむ力が緩むのを待つ。無理にスプーンを抜かない。 スプーンを口の奥に入れすぎない。 シリコン製のスプーンだと、かんだときに負担が少ない。

ステップアップポイント

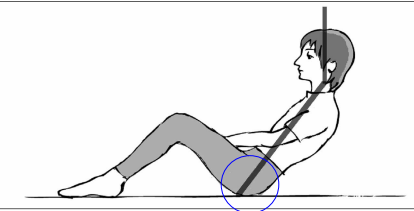
- 1 口唇を閉じて取り込むことが、自分で食べるための重要なポイント。**
口唇を閉じることで、その後の咀嚼、嚥下もスムーズになる。
- 2 スプーンはまっすぐに入れ、まっすぐにゆっくりと引き抜く。**
上向きに抜いて、食べ物を上唇にこすりつけると、自分で口唇を使って取り込むことを学習できなくなる。
- 3 食べ物は口の奥に入れない。**
舌の先は感覚が鋭く、最も動かしやすい場所。奥に入れてしまうと食べ物を咽頭（のど）に送れなくなる。

取り込む機能指導計画			
目標		手だて・配慮事項	
変化			
目標の修正		手だてなどの修正	
評価			

○記録（児童生徒の気持ちの表現の変化、食べ方の変化、そのときの手だてなどを記入する。）

/ ()

(2) 嚥下機能 食べ物を効率よく（スピード、力強さ、処理量）咽頭（のど）に送り込む機能

嚥下機能の発達段階表	児童生徒の実態（当てはまる実態に○をつけたり具体的な姿を書き込んだりする）		手だて
	嚥下の力	口唇の閉じ方	<p>◎まずは、取り込み、咀嚼を見直す。 しっかりと口唇を閉じて、口の前部に取り込むことができると、その後の咀嚼、嚥下までの流れがスムーズになる。きちんと咀嚼ができていないかも確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頭部をやや前傾した状態に保つ。 ・下顎や上唇を介助し、しっかりと口唇を閉じる。 ・むせるときには汁物にとろみをつける。 ・汁物と固形物は別にして勧める。 ・咽頭に食べ物がたまりやすいときはゼリーや、とろみをつけた水分を、間でとるようにする。  <p>図：食事指導ガイドブック（神奈川県教育委員会）より</p> <p>体幹と床との角度は、児童生徒によって、そのときの状態によって適した角度がある。特に誤嚥が心配される場合は、医師などの意見をもとに、適した角度を見つける。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・せき込むことやむせることが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・嚥下時に口唇が閉じていない。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・汁物と具が混ざるときなど、食べ物の形態によりせき込みやむせがある。 ・体調によりせき込みやむせがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口唇を閉じて嚥下することがある。 ・口唇を閉じることができるが、閉じ方が弱い。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・むせやせき込みがほとんどみられない。 ・一回の嚥下量が増える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口唇をしっかりと閉じて嚥下する。 	

○せき込み：咽頭に溜まった食べ物や痰などを出そうとしてせきをすること。
 ○むせ：食べ物や水分、だ液などが気管の入り口や気管の内部に入って（誤嚥）、せきが起ること。
 ※むせが起きない不顕性誤嚥（サイレント・アスピレーション）もある。

◎咀嚼時、嚥下時における口唇閉鎖の大切さ
 口唇を閉じると→口腔が隔離される。（口への入り口だけでなく咽頭への入り口も塞がれる。）

- ・閉鎖された空間で舌が動きやすくなる。→咀嚼がしやすい。力強く食べ物を送ることができる。
- ・口呼吸から鼻呼吸になる。→吸気と一緒に食べ物が咽頭や気管に入ることを防ぐ。（誤嚥防止）
- ・嚥下のメカニズムが働きやすくなる。（咽頭への食べ物滞留と誤嚥防止）

※嚥下のメカニズム
 食道の入り口が緩むとともに、喉頭蓋（気管の入り口をふさぐ蓋）や舌骨、声門の動きで食べ物が気管に入らないようにする仕組み。

嚥下機能指導計画			
目標		手だて・配慮事項	
変化			
目標の修正		手だてなどの修正	
評価			

○記録（児童生徒の気持ちの表現の変化、食べ方の変化、そのときの手だてなどを記入する。）
 / ()

(3) 咀嚼機能 取り込んだ食べ物を舌や歯を使ってかみくだき、だ液と混ぜて飲み込める状態にする機能

	児童生徒の実態（当てはまる実態に○をつけた り具体的な姿を書き込んだりする）	手だて
咀嚼機能の発達段階表 ↓	<p>《摂食機能初期》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペースト状の食べ物を、舌の前後の動きで咽頭に送る。 ・舌の上下の動きが出てくる。 	<p>どの段階でも 取り込む機能を見直す</p> <p>口唇を閉じて、口の前部（舌先）で取り込めるように介助する。感覚が鋭く動かしやすい舌先で食べ物をとらえることで、咀嚼の動きが高まる。舌の中央から奥に食べ物を置かれてしまうと、舌が動かせず、丸飲み込みにつながる。（取り込む機能シート参照）</p>
	<p>《摂食機能中期》 押しつぶし機能獲得</p> <ul style="list-style-type: none"> ・形のある柔らかい食べ物を、舌の上下の動きで押しつぶす。 ・舌の横への動きが出てくる。 	<p>舌の横への動き・かむ動きを高めるために</p> <p>①一口量のかみ取り 前歯や口唇で感じ取った食べ物の形状やかたさが脳に伝わることで、咀嚼が引き出される。下顎や口唇を介助して適量をかみ取れるようにする。食べ物が大きすぎると、舌で送れなくなってしまうので、一口量を小さくする（小さすぎると物性が感じ取れなくなるので注意が必要）。まだかむ動きが十分でないので、かたさも調節する。</p> <p>②スティック状の食べ物を使った咀嚼練習 スティックの一端を介助者が持ち、口唇に触れさせながら、臼歯の合わさる面かそのやや内側に乗せる。必要に応じて顎の動きを介助する。舌の左右の動きを引き出し、上下の歯でかむことを経験できるようにする。（えびせんなど）</p>
	<p>《摂食機能後期》 すりつぶし機能獲得</p> <ul style="list-style-type: none"> ・舌の左右の動きで食べ物を臼歯へ送り、臼歯の上下の動きでかむ。 ・舌の左右の動きで食べ物を臼歯へ送り、臼歯の上下の動きと舌の動きを連動させてかむようになる。（顎の上下の動き） ・ややかたさのある食べ物でも、舌の左右の動きで食べ物を臼歯へ送り、臼歯の上下の動きと舌の動きを連動させてすりつぶす動きが出てくる。（顎の回転する動き） 	<p>かむ動きをより高めるために</p> <p>③スティック状の食べ物を使った咀嚼練習 ②と同様に舌も使いながら、上下の臼歯でかむ動きを経験できるようにする。②で使った物よりもかたさと弾力のある食べ物を使い、強くかむ動きを引き出す。</p>
	<p>《摂食機能完了期》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かたい物、かみにくい物への配慮が必要であるが、食べ物を臼歯と舌の動きを連動させてすりつぶし、だ液と混ぜて飲み込みやすい状態にする。 	<p>咀嚼の様子をよく観察する</p> <p>④かたい肉類やレタスなどの葉物の野菜は、かめずに丸飲み込みすることやのどにつまることがあるので、普通食を食べている場合にも咀嚼の様子に配慮する。</p>
異常パターン	<ul style="list-style-type: none"> ◎丸飲み込みをしてしまう。 ・食事のペースが速い、食形態が合っていない、一口量が多すぎることが原因として考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で食べられる場合でも、介助を行い、一口量を学習できるようにする。 ・食欲をある程度満足させてから取り組む。 ・食べ物を一皿に少量ずつ入れる。 ・咀嚼を高めるための手だて①～③に取り組む。 ・食形態はある程度やわらかめで、歯ごたえのある食べ物を選ぶ。

ステップアップポイント

- 咀嚼の発達を見るポイント！ ポイントは舌の動き
- ・左右の動き：食べ物を歯に送ることができるので、すりつぶし機能獲得の目安になる。→後期→完了期
 - ・上下の動き：舌で前歯の裏側に食べ物を押しつけることができるので押しつぶし機能獲得の目安になる。→中期
 - ・前後の動き：食べ物を押しつぶすことができずに咽頭に送るので、初期食（ペースト）が適している。→初期

咀嚼機能指導計画

目標		手だて・配慮事項
変化		
目標の修正		手だてなどの修正
評価		

○記録（児童生徒の気持ちの表現の変化、食べ方の変化、そのときの手だてなどを記入する。）

／（ ）

(4) 自食機能	手や食具を使って、自力で食べ物を取り込んで食べる機能
----------	----------------------------

	児童生徒の実態（当てはまる実態に○をつけたり具体的な姿を書き込んだりする）	手だて
自食機能の発達段階表	自食機能準備 <p>< 自食を始める目安 ></p> <ul style="list-style-type: none"> 物を握ったり離したりする動きがある。 指や玩具を口元へ運ぶなど、手と口の協調した運動が見られる。 頭部のコントロールと体幹を安定して保つことができる。 	※取り込む機能や嚥下機能が十分に育っていることを確認してから自食を始める。 咀嚼機能はすりつぶし機能を獲得していることが望ましい。
	手づかみ食べ機能 <p>< 手の運び方 ></p> <ul style="list-style-type: none"> 手にした食べ物を口唇中央から取り込む。 頭を動かさずに手を口の前に持ってくる。 	<ul style="list-style-type: none"> パンなどを持ちやすい太さと長さに調整する。 口唇が閉じないときや、口の奥に入れすぎてしまうときには介助する。 自分で一口量を学べるよう、かみ切って取り込むことにも取り組む。
	<p>< 取り込み方 ></p> <ul style="list-style-type: none"> 口唇を閉じて取り込む。 口の奥に食べ物を入れすぎずに取り込む。 前歯で一口量をかみとる。 	<ul style="list-style-type: none"> 手でスムーズに取り込むこと、口唇と前歯でとらえることができるようになってくると、食具食べにスムーズに移行できる。
	食具食べ機能 <p>< 食具の扱い方 ></p> <ul style="list-style-type: none"> 食べ物をのせたスプーンを口に運ぶ。 一口量をすくって、口に運ぶ。 食具を口唇中央から挿入する。 食具を正しく握る。 使える食具が広がる。 	<ul style="list-style-type: none"> 最初は教師が一口量をスプーンにすくっておく。フォークでも可。 口唇が閉じないときや、口の奥に入れすぎてしまうときには介助する。 口に運ぶことと、取り込むことができるようになったら、食べ物をすくうことに取り組む。 最初は器の端に食べ物を寄せておき、一口量をすくいやすくしておく。 必要に応じて柄を太くした食具や、柄の角度を変えた食具、縁がすくいやすくなった器を使用する。

自食機能指導計画			
目標		手だて・配慮事項	
変化			
目標の修正		手だてなどの修正	
評価			

ステップアップポイント

- 1 取り込み方や咀嚼の様子をしっかりとチェックする。**
取り込み時に口唇が閉じなくなることや口の奥に食べ物を入れることがある。口の奥に食べ物が入ると、舌が使えず、咀嚼せず飲み込むことを招くおそれがある。
- 2 姿勢を安定させる。**
姿勢が不安定だと、手がバランスをとるために働き、食事作業に使えなくなってしまう。足裏を床につけ、体幹が安定するよう調節する。

○記録（児童生徒の気持ちの表現の変化、食べ方の変化、そのときの手だてなどを記入する。）

/ ()

○記録（つづき）

/ ()